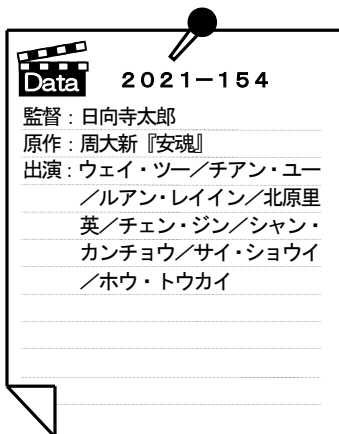




みどころ

ノーベル賞作家・莫言と同世代の中国人作家・周大新の同名の原作が日中国交正常化50周年の日中合作映画として、日向寺監督の手で映画化！

“安魂”とは魂を安んじることだが、原作者自身を体現した主人公(?)は、突然逝ってしまった最愛の息子の魂を探し求めて、如何なる行動を？“降霊術者”と聞いただけでインチキっぽい、いやいや、この父親のような“信念の人”こそ、それにハマりそう・・・。

興味深い物語の展開の中で導かれる結末は如何に？奇跡は起きるの？それは、あなた自身の目でしっかりと！

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ————

原作の作家是与获得诺贝尔奖的作家莫言同一时代的中国人作家周大新，作为中日外交正常化50年中日合作的电影，由日向寺担当导演。

所谓的安魂是指灵魂得到安放。主人公最心爱的儿子突然去世，怎样才能找到儿子的灵魂？向能通灵的人去询问，虽然听起来像是骗局，但对于有像这位父亲一样有信念的人，一定会沉迷于这部电影的。

这么有深度的电影结局究竟会变成什么样？会发生奇迹吗？来亲身感受吧！

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ————

■ “中国国家第一級作家”の原作を周大新監督が映画化！ ■

私は中国人で初めてノーベル文学賞を受賞した莫言の小説『赤い高粱』や、それを張芸謀（チャン・イーモウ）監督が映画化した『紅いコーリャン（紅高粱）』（87年）（『シネマ5』72頁）等をよく知っていたが、ほぼ同世代の中国人作家・周大新（1952年生れ）は全く知らなかった。彼も人民解放軍の軍人で、政府から「中国国家一級作家」に認

定されているそうだから、中国は広い。そんな彼の原作『安魂』を、なぜか『火垂るの墓』（08年）（『シネマ20』280頁）等の日向寺太郎監督が、日中国交正常化50周年の日中合作映画として映画化することに。

■□■父子の対立と再生の物語！そう思っているとアレレ・・・■□■

父親の唐大道（ウェイ・ツー）は、原作者自身を体現するような有名な作家。社会的な名誉も地位も手に入れた大道は、自ら選んだ道こそが正しいものだと信じて疑わない信念の人（独善的な人？）だった。そのため、一人息子の英健（チアン・ユー）に対する教育も厳格で、今日は、息子が自宅に連れてきた恋人・張爽（ルアン・レイイン）について、「彼女は農村出身だ。お前にはふさわしくない。」と完全拒否！おい、おい、今どき、それはないだろう・・・。

本作は、そんな父子の対立と再生の物語・・・？そう思っていると、突然、英健が重度の脳腫瘍であることが判明した上、あっけなく死んでしまったからアレレ・・・。本作は一体どんなストーリーに？

■□■安魂とは？そのやり方は？降霊術って本物？■□■

原作も本作も、タイトルは『安魂』これは、日本語では「魂を安んじること」だが、中国語でもそれは同じ。したがって、本作の焦点は、英健の死亡にもかかわらず、英健の魂はまだ自分の近くにいるはずだと信じ込み、キリスト教、イスラム教を含む様々な本を読み漁り、英健の魂を探し求める大道の姿になっていく。

そんな中、大道はある日、英健と瓜二つの若者・劉力宏（チアン・ユー）に出会うと、力宏に息子の姿を重ねることに。その挙句、大道は力宏と彼の父親代わりになっている叔父の劉万山（ジャン・リー）の元を度々訪れることに。“降霊術者”を名乗る万山らの仕事は「魂を呼び戻すこと」だが、それって本当？ひょっとして、そりゃインチキなのでは？

■□■女優・北原里英の挑戦とその中国語に注目！■□■

私は昔から女性アイドルが大好きだが、AKB48を卒業し女優として大成長したのが、初代センターを務めた大島優子と、それに続いて『もらとりあむタマ子』（13年）（『シネマ32』125頁）で主演した前田敦子だ。しかし、本作には、2018年にAKB48を卒業した後、舞台、ドラマ、映画に挑戦している北原里英が、爽の友人になる日本人留学生・星崎沙紀役で登場し、全編中国語のセリフに挑戦しているのでそれに注目！

傷心の爽と偶然知り合っただけの沙紀が、本作のような重要な役割を果たしていく脚本には少し違和感があるが、彼女の汉语は私でも十分聞き取れるのでうれしい。しかし、沙紀の意見を聞くまでもなく、誰がどう見ても力宏と万山の「安魂商売」はインチキだとわかるはずだ。しかるに、なぜ大道は次々と大枚を注ぎ込んで“安魂”にのめりこんでいくの？本作はそこあたりの展開がキモだが、妻・胡瑞英（チェン・ジン）の忠告をあくまで無視し続ける大道の姿に、私はアレレ・・・。

■□■安魂商売のインチキ性とは本作に見る奇跡は？■□■

中国語の「騙（ピエン）」は「騙す」という意味で、「詐騙（ジャー・ピエン）」は日本語の詐欺と同じだ。しかして、力宏や万山がやっている“安魂商売”は、きっと詐欺！そう確信している大道の妻・瑞英は、恐る恐る大道の後について安魂の現場（？）に臨んだが、そのインチキ性は如何に？

作家・周大新が『安魂』というタイトルの小説を書いたのは、どうしても息子の死を受け入れることができない父親と、死んでしまった息子との間で、親子とは？死とは？魂とは？生命の繋がりとは？そんな根源的な問いを突き詰めるためだ。したがって、そんな物語の結末が「詐欺師、逮捕！」で終わるはずはない。

本作の公式パンフレットでは、「しかし、息子にもう一度会いたいと願う強い気持ちは一つの奇跡を起こすことに。」と書いている。さあ、そんな本作の結末は如何に？それは、あなた自身の目でしっかりと！

2021（令和3）年11月10日記

『日本と中国』2260(2022年1月1日)



2021年上映 製作委員会 (2021/年曜・日本・カンパニー)
 監督：日向寺太郎 原作：周大新
 脚本：富川元文 出演：ウエイ・ツェン、チアン・ユー、
 リアソン・レイイン、北原里英、
 チェン・ジン
 製作年：2021年中国・日本 108分
 配給：VIVA企画
 1月15日より岩波ホール
 ほかに全国順次ロードショー

『火垂るの墓』『こどもしよく
 どん』の日向寺太郎監督とべ
 テラノ脚本家・富川元文の御両
 人が初タッグ組んだ日中合作
 映画が登場した。
 本作はベルリン国際映画祭金
 熊賞を受賞した『香魂女』湖に
 生きる(シエ・フエイ監督)の
 原作者でもある周大新(マウ・
 ターシン)の同名原作を映画化
 したもの。原作は、一人っ子政
 策の渦中に生まれた一人息子若
 くして亡くした周氏自身の、息子
 との魂の交流を綴った体験を元
 にした物語だ。
 原作のテーマとなる大切な人
 に先立たれた人々の心の再生に
 富川氏が大胆なアレンジを加え
 息子と瓜二つの青年との出会いを
 通して、主人公の父親とその家族
 が生きていく力を取り戻していく
 姿を感動的に描いている。わが子
 に先立たれた喪失感と後悔の念を
 抱え、息子が生きた証を探し求め
 る父親が見つけたものは？
 主人公は社会的な名誉も地位
 も手に入れた作家の唐大道。

失った時間を、誰と生きる？

日中国交正常化50周年に日中合作で描かれる、心の再生の物語

彼は自ら選んだ道こそが最も正
 しい道だと信じて疑わない独断
 的な人間。それは、愛する息子、
 英健に対しても同じで、恋人の
 張麗が「農村出身」という理由
 だけで息子の幸せにならないと
 断定し、強引に別れさせていた。
 しかし、その絶対的な信念は、父
 さんが好きなものは、自分の心の
 中の誰なんだ」という言葉を重
 して英健が29歳の若さでこの世
 を去ると腐壊してしまうことに。
 息子はどんな生き方を望んで
 いたのか？ まだ近くにいるはず
 だと様々な本を読みあさり息子
 の魂を探る中、英健と瓜二つの
 劉力宏と出逢い、息子の姿を重
 ね度々彼のものを防げる大道。
 妻の瑞英は大道を制止するが、
 彼と会うことを止めることはで
 きなかった。夫の誤った信念と
 最愛は如何に？ 張麗と日本人女
 子留学生との間で展開する意外
 な心の交流にも注目しながら、
 息子にもう一度会いたいと願う
 強い気持ちで最後を生み出す。あ
 る奇跡を、しっかりと見据えた。

熱血弁護士 坂和章平 中国映画を語る(58)



映画を語る！シリーズをはじめ数回に亘って著書多数、公
 社、目友好関係、NPO系大阪府中友好会理事。

(まわ・しんぺい)
 1948年生まれ、松山市生まれ、
 大阪大学経済学部卒。都立
 開成、開成を経て数多く主
 がた、日本郵政は国営化、
 川原、同年に日本勧業会
 「業務責任者」を受賞、「第1
 的中国映画展(2004年)
 『ふたつのチャンピオン』